

安藤忠雄著「若者たちへ - リスク恐れず挑戦しよう - 」

論点、読売新聞 2011年2月22日朝刊を読む

リスク恐れず挑戦しよう

1. 大阪・梅田に昨年、私が設計を手がけた複合商業ビルが竣^{しゅんこう}工した。この中に国内最大規模の書店「MARUZEN&ジュンク堂」がオープンした。電子書籍が話題となり、活字離れも進むなかで思い切ったことをするものだと驚いた。
2. ジュンク堂の会長は「これからは本の時代だ」と言い切った。無謀だと考える人もいるだろう。だが、見方を変えれば、勇敢な挑戦といえるのではないか。最近、若者と接して強く感じるのは、そうした夢に向かって踏み出す勇気や考える力を失っていることだ。
3. 高度成長期以後、経済力こそが豊かさだという認識が広がり、誰もが一流大学から一流企業へと進むコースを目指すようになった。受験生を一つの尺度ではかるセンター試験も導入され、知識詰め込み型教育が加速された。これでは思考力が養われるはずがない。
4. インターネットからの不確かで断片的な情報で世界を理解したつもりになることも、若者の特徴だろう。ケータイで多様なつながりを持っているようでも、実際につきあうのは限られた人だけで、自らの世界に閉じこもっている。他者と本音で対話をする機会がどれだけあるのか。心を揺さぶられる体験も乏しく、夢や希望を抱くこともできないのではないか。
5. 私は独学で建築を学んだ。近代建築の巨匠、ル・コルビュジエの作品集を読み、図面のトレースを繰り返した。パルテノン神殿からガウディまで、世界中、建築行脚の旅もした。一方で東京に足を運び、演劇や美術など時代の最先端の表現者の仕事にも刺激を受けた。こうした20代の体験は人生における財産だと確信している。
6. なぜ人は学ぶのか。人生に立ち向かっていく行動力、判断力、思考力を身につけるためではないか。
7. かつて、日本には確かな文化力があつた。明治時代に来日したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、自然の美しさとともに、家族間や地域社会での人々の愛情の深さに心を打たれ、この国の民族は世界一だと感じたそうだ。
8. 戦乱のない平和な江戸時代に培われた精神文化や技能の伝統が庶民の生活にまで浸透し、大人

は懸命に働き、子どもは瞳を輝かせていたのだろう。生命の神秘や自然の厳しさも生きていくための知恵や社会性も、幅広い世代の人々との日常の対話を通して学んでいた。

9．わずか1世紀の間に日本は大きく変貌した。モノの豊かさとは裏腹に、経済効率最優先の中で心の豊かさや生きていく意味を喪失した人々は、進むべき道を見つけられずにいる。だが、日本人が培ってきた社会的遺伝子は失われていないと信じたい。経済の低迷や環境破壊という問題を抱える今だからこそ、じっくり思考することを忘れてはいけない。伝統ある文化を大切にし、創造力ある社会を築いて次世代へとつなぎたい。そのためにも、若い力が欠かせない。

10．若き日の私も暗闇の中を手探りで生きるほかなかったが、夢とエネルギーは存分にあった。空き地を見つけては、勝手に建物を設計して掛け合ったり、自分なりの都市構想を練って市役所に持ち込んだりもした。私の人生もまた、冒頭の書店の話のように無謀で大胆な挑戦の連続だった。

11．社会全体が元気を失っている今こそ、若者には、他者との衝突や失敗のリスクを恐れず、果敢に挑戦する勇気をもってほしい。

[コメント]

安藤忠雄先生の若者へのメッセージ。若者たちと言っておられるが、おそらくは、現代に生きるすべての日本人に対するメッセージ。このメッセージは、今、この国に生きるすべての日本人が真正面から受け取り、自分自身のこととして考えるべき内容と私は確信する。今は、国家破産、自治体破産、危機的状況に日本がある。津波が来るのが見えているのに何もしない状況と同じだ。何もしないこと自体がリスクなのだから、リスクを恐れず挑戦する以外ない。